

星

【特集】三十年の軌跡



小郡市を拠点に活動をしている和太鼓団体「おごり七太鼓白鷺会」^{はくろ}。創立三十周年を記念し、結成当初から現在までの歩みや特色、白鷺会を支える方々にお話を伺いました。

白鷺会の結成は、平成8年にさかのぼります。「まちづくりに創作太鼓を！」という当時の田籠市長の意向を受け、同年2月に発足。市の鳥であるシラサギにちなみ「白鷺会」と命名されました。

当時は、自衛隊の敷地内にある建物を主な練習会場とし、そこへ今では国内外で活躍する和太鼓のプロ集団「DRUM TAO」を講師として招き、その指導のもと練習を開始しました。

同年4月には小郡市内でDRUM TAO公演が行われ、その前座として白鷺会が出演。そして8月には、DRUM TAOが作曲した「伝説」でデビューを果たしました。「伝説」は、七夕伝説をモチーフにした楽曲で、その後白鷺会のメイン曲となっています。以来、市内外のさまざまなイベントや祭りでも、

力強い演奏を続けています。

県内最大という直径六尺(約1メートル81・8センチ)の桶胴大太鼓^{おけどう}は「伝説」において力強い彦星(牽牛^{せむし})を表現しており、美しい織姫を表現する直径三尺(約90・9センチ)の赤巴長胴大太鼓^{あかともながどう}は、創設当初、九州で初めて導入されたもので、七夕太鼓のシンボルとなっています。これら2つの大太鼓と「伝説」は、まさに七夕の里おごりを象徴する白鷺会の誇りとして、存在感を放っています。

5月31日に生涯学習センターで行われた三十周年記念公演では、30年分の思いや情熱が込められた演奏が披露されました。白鷺会は今後も、市内各地区の夏祭りやイベントなどへの出演を予定しています。力強く、そして迫力ある太鼓の音色を、ぜひ一度体感してみたいかがでしょうか。

活動が気になる方は、気軽に体験もできます。ぜひご連絡ください。

白鷺会代表 (成富)

☎090・1089・2894





現在代表を務めるのは、白鷺会結成当初からメンバーとして活躍されている成富^{七あき}明さん。三十周年を迎えた今の気持ちや白鷺会の今後について伺いました。



代表の成富さん

◆ 30年、そしてこれから

——三十周年を迎えての今のお気持ちはいかがですか。

成富 自分自身、よくここまで続いたなと思っています。最初は5年くらいかな、と思っていたので。折角ここまで来たなら今後も40年、50年と続いてほしいという思いがあります。ただ、後を引き継ぐ人がいないと、少し厳しいかもしれないとも感じています。

——やはり人手不足は深刻でしょうか。

成富 そうですね。結成当初は多い時で70人ほどいましたが、今は22人に減りました。当時は一日の練習で太鼓を叩けるのは2回か3回ほどで、交代しながら練習していました。今はメンバーの4割が還暦を過ぎていて、人手不足だけ

でなく高齢化も進んでいる状況です。

——今のジュニアメンバーに向けて思っていることがあれば教えてください。

成富 ジュニアメンバーは今3人いるんですけど、みんなすごく頑張っているんです。練習に一番に来て太鼓を出したりシニアメンバーが片付けに手間取っていると「こうしたら入りますよ」と声をかけてくれたり、自主性があって嬉しく思っています。

——最後に、白鷺会を漢字一文字で表すと何だと思えますか。

成富 難しいですね(笑)。「星」です。小郡の七夕伝説と白鷺会は30年間つながり続けてきたと思います。

取材日、最後に聴いた曲は「流れ星」。星に届くような、力強い響きが印象的でした。

◆ 無理なく、長く。太鼓と歩んだ25年間

次にお話を伺ったのは、白鷺会で25年にわたり活動されている山内てる世さん。山内さんは中学・



高校時代、ブラスバンドでパーカッションを担当していました。その後、朝倉市の和太鼓チームに所属していました。小郡市に引っ越し、白鷺会の公演を見たことで入会を決めたそうです。

「25年も太鼓を続けられたのは、やっぱり音楽が好きだったからですね。あと白鷺会は自分の体調に合わせて参加できるというか、長く休んでも自分のペースで復帰できるので、続いたのだと思います」と、長く活動を続けてこられた理由について話す山内さん。今後も健康なうちは、自分のペースで白鷺会での活動を続けていきたいと語ってくれました。

◆ 若い力がつなぐ、 これからの白鷺会

大人のメンバーと一緒に力強い太鼓の音を響かせていたのは、正岡駿佑さん（18歳）、野口悠さん（14歳）、江頭隆翔さん（13歳）。人手不足や高齢化が課題の白鷺会ですが、若くはつらつとしたジュニアメンバーが一生懸命練習に励んでいます。

3人とも小学生の頃から白鷺会の一員として太鼓の練習に励んでおり、経験年数は5年以上になるそうです。白鷺会に入会したきっかけについては、「父が白鷺会に入っていて、一緒にやろうと誘われた」「気分で」「白鷺会の演奏を聴いてかっこいいと思った」など、動機はそれぞれ。

太鼓の魅力については、太鼓の音そのものや、打っているときの手の感触など理由はさまざまですが、言葉の端々から「太鼓愛」が伝わってきました。

これまでの活動を振り返り、「本番で間違えず自分の最高の演奏ができたときは嬉しかった」「新しい曲を覚えたときが嬉しかった」「曲を完璧にやり切ったときに達成感を感じた」と目を輝かせる3人。本番の緊張感や、仲間と音を合わせる楽しさ、やり遂げたときの喜びなど、それぞれの経験をとおして太鼓の魅力を実感している様子が伺えました。

現在の課題については、曲を正確に覚えることや、演奏時の強弱の付け方、曲の雰囲気をよりの確に表現することなどが挙げられました。特に、曲ごとの世界観や場面に合わせた音の出し方を工夫することに難しさを感じているそうです。また、演奏中に表情が硬くなってしまうことから、見る人も楽しさが伝わるよう、笑顔を意識することも心がけているとのこ

と。日々、先輩たちの背中を追いながら、演奏技術の向上に努めています。

今後については、勉学や部活動を優先しながら、時間の許す範囲で白鷺会の活動を続けていきたいと話します。四十周年に向けて、無理のない形で関わりながら、自分たちらしい演奏を続けていきたいと、前向きな意気込みを語ってくれました。

左から正岡さん、江頭さん、野口さん。取材中も太鼓の音色に体を揺らす姿が印象的で、太鼓が好きという思いが伝わってきました。

